

「山上の垂訓」(マタイ5～7章)を学ぶ

以下は、2018年10月から11月にかけて聖書研究会神戸集会の日曜礼拝で学んだ内容を整理したものです。山上の垂訓の様々な部分を取り上げていますが、時間の関係で取り上げなかった部分も多く、全内容を網羅した注解ではありませんので、ご理解をお願いいたします。

●はじめに「天国の福音」とは

山上の垂訓は、イエスの宣教初期の基本的なメッセージです。彼は「天国は近づいた」(マタイ4:17)と福音を語り始め、「御国の福音」(4:23)を宣べ伝えました。山上の垂訓の冒頭も「天国は彼らのもの」(5:3)です。「主の祈り」にも、「御国を来たらせたまえ」(6:19)という一節があり、その章末には「まず神の国と神の義を求めなさい」(6:33)という言葉があります。

これらの箇所に出て来る天国・神の国・御国は、すべて「王国」(原語はバシレイア)に形容詞や定冠詞がついたものであり、同義語です。イエスは何度も「神の国」「天国」について語りました。

「天国」というと、皆さんは何を想像されるでしょうか。ちなみに、一般のニュースで「天国」をキーワードに検索してみると、主に2つの用法が見つかります。一つは「天国の父も見ている」のように、すでに死んでいることを意味する用法です。日本は仏教国ですが、こういう文脈では決して「極楽の…」とは言いません。これは不思議ですね。そして、もう一つの用法は「歩行者天国」です。

イエスの語った「天国」は、この2つの用法の、どちらに近いでしょうか。私は「歩行者天国」の方だと思います。イエスは「死んでから天国に行く」のではなく、天国を、この地上に実現するものとして語りました。歩行者天国が実施されると、今まで優先権のあった自働車が優先権を失い、優先権の無かった歩行者が優先権を得ます。これと同様に、天国が実現すると、今の世界で優先権のある権力者は権力を失い、今の世界では無力な貧しい者が力を得ます。これこそが神の正義であり、神の国です。

山上の垂訓は、心の持ち方を教えていると考えがちですが、そうではありません。彼は世界を変える神の国のビジョンを語ったのです。ローマ帝国はキリスト教を迫害しましたが、結果的にローマ帝国はキリスト教に飲み込まれました。そして、ローマ帝国を滅ぼした野蛮人たちは、キリスト教を受け入れて文化や芸術を愛する人々になったのでした。神の国のメッセージは世界を変えたのです。ここに書かれている神の国のメッセージが、そういう力を持ったものであることを心にとめて、一緒に学んで行きましょう。

●なぜ「山上の垂訓」と呼ぶか

この説教の冒頭、5:1には「イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると…」という言葉があり、また、終わった後の8:1は「イエスが山をお降りになると…」となっています。そこで、この長い説教が山の上で語られたことがわかります。そこでこの個所を「山上の垂訓」あるいは「山上の説教」と言うのです。

この教えが語られた山だとされる山は、ガリラヤ湖の北岸のカペナウム近くにあります。山の上には美しい八角形の教会があり、いつも多くの観光客でにぎわっています。山上からは美しいガリラヤ湖の風景が広がっています。

●八つの祝福 5:3-10

教会堂が八角形なのは、山上の垂訓の冒頭に「八福」と言われる八種の祝福された人々のリストがあることにちなんでいます。教会堂の8つの面には、それらの8つの言葉が刻まれています。

5:3 「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

5:4 悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。

5:5 柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

5:6 義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであろう。

5:7 あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。

5:8 心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

5:9 平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。

5:10 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

これらが八つのさいわい（八福／**The Beatitudes**）です。プロテスタント教会は次の節を含めて「九福」と言うことが多いですが、内容から見て8の方が妥当ではないかと思えます。そのはじめと終りが「天国」であることは、とても大きな意味があり、この祝福（さいわい）が天国に関するものであることを意味します。

では冒頭の「こころの貧しい人たちは」とは、どういう意味でしょうか。日本語訳はいずれも「こころの貧しい」ですが、これは「霊において貧しい」が正確な訳です。しかし、いずれにしてもあまりに哲学的な表現で、意味がよくわかりません。こういう箇所は、それだけ見て解釈しても間違える可能性が高いので、まずは文脈を見る必要があります。その意味で並行箇所のルカ 6:20（平地の垂訓とも言われる）は役立ちます。そこでは「貧しい人たちは、さいわいだ」となっています。これは意味が非常に明確です。

ルカの記録によればイエスは、貧しい、飢えている、泣いている、人々に迫害されている人はさいわいだと教え、富んでいる、満腹している、笑っている、人にほめられている人々は災いだと教えています。マタイによる福音書の方も、基本的には似た内容を語っていると思われまます。

そこで、山上の垂訓の「心の貧しい人」、あるいは「霊においてまずしい人」は、一般的な「貧しい人」と似た意味だと私は考えます。これは、最後にもう一度論じてみましょう。

● 幸いな者と不幸な者が逆転？

ルカによる福音書の方を読むと、飢えている者は飽き足りるようになり、満腹している者は飢えるようになる、そして、泣いている者は笑うようになり、笑っている者は悲しみ泣くようになる、というわけで、まるで「塞翁が馬」という物語のようです。一見、幸いに思えることが、災いになり、災いに思えることが幸いになる。時が経つにつれて、運が上がったり下がったり。人生とはそういうものです。しかし、イエスが言いたいのはそういうことなのではないでしょうか。日本人は「中流意識」の人が多いたと思います、そういう人は喜ぶことも悲しむこともなく、平々凡々ということになってしまいます。

しかし、富んでいる者と貧しいものが入れ替わるのは、旧約聖書において主の救いを意味する定型表現で、何度も登場します。サムエル記2：1～10、詩編144、イザヤ29：19、イザヤ61：1など多くの箇所がありますが、ここでは新約聖書のマリヤ賛歌の一部を引用してみましょう。ルカ 1:51-53 です。

- 1:51 主はみ腕をもって力をふるい、心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、
- 1:52 権力ある者を王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、
- 1:53 飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさい。

つまり、メシアが来て神の国が実現すると、貧しい者と富んだ者の地位が逆転するのです。これこそが「神の国の福音」なのです。

では、神の国が実現する前から、すでに裕福である人々はどうなるのでしょうか。それは、イエスの時代、特にこのメッセージを聞いたユダヤ人からは、ほとんど出ない質問でした。主の民は祝福の基とされていながら、いつもいじめられる存在でした。イエスの時代には、ユダヤ人であるだけで二級市民とされ、ローマの兵隊にいじめられて不正に苦しんでいたのです。

イエスが語った神の国は、プロレタリア革命と似ています。金持ちはすべて「しえたげる者」であり悪なのです。実際、当時の社会で豊かな人々というのは、真つ当なことをして豊かになったわけではありません。しかし、預言者たちはメシアの来臨した時には、正義

が実現し、貧しい正直者が顧みられると語ったのでした。貧しい者と富んだ者が入れ替わるというイエスのメッセージは、「メシア時代が来る」という宣言だったのです。

しかし、今日、私たちはイエスが来ても何も変わらなかったことを知っています。そこで、ここにある「さいわい」も、実際に世界が変わって「天国」が来ることではなく、信仰によって今すぐ受け取れる「霊的な幸い」を意味するか、あるいは「足るを知ること」だと考えがちです。

しかし、ここにある「さいわい」が実際に成就する時代、メシアの時代が実際に来ることを、私たちは忘れてはならないのです。

●ユダヤ人の使命と天国

マタイの八福の前半「こころの貧しい、悲しんでいる、柔和な、義に飢えかわいている」は、通常考えるとマイナスの要因です。「柔和な」は良い意味もありますが、一説では「優柔不断」、「気が弱い」と訳するべきだ、とも言われます。特に、現代イスラエルのような厳しい社会では、物事をはっきり言わないのは、とても悪い性質です。

ところが、後半の4項目は「あわれみ深い、心の清い、平和をつくり出す、義のために迫害される」ですが、これらなは、それ自体が美德とされる性質で、報償も「マイナスの解消」ではなくプラスの事柄であるように思えます。特に、「平和を作り出す」は非常に行動的です。

このメッセージを聞いたのがユダヤ人であることに注意しましょう。彼らは「祝福の基」(創世記 12:2) となるために選ばれた民族であり、そのために働く必要がありました。しかし、彼らの歴史はまさに苦難の連続でした。それでも、神の契約の民である以上、神が彼らを祝福される日は、いつか必ずやって来ます。その時こそが「神の国」が実現する時なのです。その時、彼らの存在は世界の祝福となるのです。

八福に数えられた8つの状態や属性が、メシア自身の状態や属性であることも注目に値します。イエスは「私のようにになりなさい」と呼び掛けているのです。彼は悲しみの人であり、病を知っていました。しかし、その方こそが世界に救いをもたらすお方だったのです。八福はイエス自身の告白でした。

私たちがまた、異邦人の中から「メシアの体」「キリストの花嫁」として選ばれました。神の国のために働くのは容易なことではありません。実際のところ、山上の垂訓を読んで行くと、凡人にはほとんど実行不能であるように思えますが、それでも私たちは神の国を実現するために、チャレンジしなければならないのです。

●地の塩、世の光 5:13-16

その次に続く、地の塩、世の光の教えはよく知られています。約束の民イスラエルは、イザヤ 49:6 などで「諸国民の光」となる使命が与えられています。それが神がイスラエルを選ばれた目的でした。

5:13 あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。

5:14 あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。

5:15 また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。

5:16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

「塩のききめがなくなる」は、今日では想像しにくい言葉ですが、質の悪い岩塩を使っていると、よくわかる言葉だと聞いたことがあります。質の悪い岩塩は、半分以上が砂や岩なので、水を入れた容器に入れて、上澄みの塩水を使うのです。ところが、塩気が無くなってしまうと、ちょうどお茶の出がらしのようになって、何も使い道が無くなってしまいます。まさに人々にふみつけられるしかないのです。

また、「山の上にある町」もイスラエルならではの表現です。イスラエルでは、なぜかエルサレムのように「山の上」に町が作られます。山の下に作った方が交通の便も水の確保の面でも良いのではないかと思うのですが、たぶん安全保障上の理由があるのでしょう。

とにかく、私たちは自分のために信仰をするのではなく、「人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめる」ことが目的なのだと、イエスは教えています。普通に良いことをするだけでは「あの人はすばらしい」ということになって「天にいますあなたがたの父をあがめる」ことになりません。どうすれば、人々が天の父をあがめることになるのでしょうか。

実際、ある人がすばらしい生き方をしているので「なぜそんな生き方ができるのか」と、その人に質問したところ「教会に通っている」と言われて、自分もクリスチャンになった、という証を聞いたことがあります。誰でも、その人の生き方を、周囲の人は見えています。それが「地の塩、世の光」になるように、心がけなければなりません。

● 「律法や預言者」とイエス 5:17-20

イエスが出現した時代、ユダヤ教にはいくつかの流れがありました。そのうち2つは聖書に出て来るパリサイ派とサドカイ派でした。サドカイ派は祭司階級で、信仰実践や心の信仰よりも神殿祭儀が重要と考えました。しかし、彼らは紀元70年の神殿崩壊と共に、仕事を失って消え去りました。一方、パリサイ派は律法を解釈し、普通の人にも教えるべきだと考える人々でした。彼らは現在のユダヤ教の祖先となりました。

パリサイ派の登場前、人々が神の意志を知る方法は、祭司と預言者しかありませんでした。たとえば「家を買っても良いかどうか」などの問題があったとします。祭司の所に行くと、彼らはウリムとトンミムという道具を使うなどして、是か非かを告げました。また、預言者も靈感によって神の意志を告げることができました。(サムエル記上 9:6 以下参照)

しかし、大きな問題は、祭司や預言者が人間であり、権力を手にするとすぐに腐敗してしまっただけでした。そこでパリサイ派は画期的な方法を考え出したのです。それは「聖書のテキストをよく学べば神の意志を知ることができる」という考えでした。当時の世界で、聖なる文書を読めば神の意志がわかると考えた人々は、彼らだけでした。彼らは革命家だったのです。

しかし、これは容易な事ではありませんでした。まず、聖書自体の正確な写本を大量生産して、各地のシナゴグに配置しました。そして彼らは、聖書を読むための教育を一般の人々に施すシステムも作ったのです。

ところが、あらゆる革命がそうであるように、彼らもまた腐敗してしまっただけです。だからイエスはマタイ 23:2-3 で「彼らがあなたがたに言うことは、みな守って実行しなさい。しかし、彼らのすることには、ならうな」と言っています。彼らはかなり正しく神の言葉を解釈したのですが、「人には厳しく自分には甘く」適用したのです。イエスは「聖書を読んで神の御心を知るべきだ」という点ではパリサイ派に同意し、彼らの聖書解釈も評価していたのですが、ただ、パリサイ派の「行為」に反対したのです。

イエスはパリサイ派の行為には反対でしたが、律法を行うことに反対したわけではありません。むしろその逆でした。

5:17 わたしが律法や預言者を廃するためにはきた、と思っただけではない。廃するためではなく、成就するためにきたのである。

5:18 よく言うておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである。

5:19 それだから、これらの最も小さいいましめの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。しかし、これをおこないまたそう教える者は、天国で大いなる者と呼ばれるであろう。

5:20 わたしは言うておく。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はいることはできない。

イエスが「律法や預言者を廃するためきた、と思っはならない」と言っおられるのはとても興味深いことです。それは、当時すでにそう考える人々がいたのか、あるいは後にそう考える人々が現れることを予想されたのか、どちらかでしょう。

「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ…」という言い回しは、彼らの義も「それなりの」レベルであったことを示しています。しかし、イエスはさらに高いレベルを目指すよう、人々に求めたのです。

● 「昔の人々」とイエスの教えの違い 5:21-

そしてイエスは、律法の何項目かを取り上げて、以前からの律法と、自分の教えの違いを語っています。まずは「殺すな」の箇所（マタイ 5:21-22）を読みましょう。

5:21 昔の人々に『殺すな。殺す者は裁判を受けねばならない』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。

5:22 しかし、わたしはあなたがたに言う。兄弟に対して怒る者は、だれでも裁判を受けねばならない。兄弟にむかって愚か者と言う者は、議会に引きわたされるであろう。また、ばか者と言う者は、地獄の火に投げ込まれるであろう。

そのほか、姦淫、いつわり誓うな、目には目を、隣人を愛する、について教えが繰り返されていますが、基本的な考え方は全て共通です。イエスは「殺す」という行為の前にある「憎む」という行為を問題視し、それを解決するためには「和解」が必要だと説くのです。イエスは律法で禁止されている行為そのものではなく、その背後にある動機、そしてその解決方法まで提唱しました。これは確かに「廃する」のではなく「成就する」と言うべき教えでしょう。

姦淫に関する「情欲をいだいて女を見る者は…」という教えは、実はパリサイ派も注目していたものでした。彼らは十戒の最後の項目（創世記 20:17）の「むさぼるな」に注目しました。これは「欲しがる」という意味であって「盗む」という意味ではないのです。そこで「欲しい」と思っただけで違反になってしまいます。そこで、女性を見て「欲しがる」想いを持つてはいけないというので、現在でも超正統派ユダヤ教徒は、公共の場所に女性の写真を掲示することに反対するので、男尊女卑だと批判されます。やり方に問題はあるでしょうが、彼らも、彼らなりの方法で、同じ目標を目指していたのです。また、安息日を守ることについての、パリサイ派の考えも興味深いものです。監獄にいる

人は、安息日を守ることが出来るでしょうか。安息日に仕事をするかどうか、囚人は自ら決定できません。そういう状態にある人々は、仮に安息日に「休んだ」ところで、それは「守った」とは認められない、とパリサイ派は考えました。安息日を守るという「行為」ではなく、その「意思」に注目したのです。

●完全な行いは可能なのか 5:48

さて、5章17節から章末までを一読してみると「理窟は確かにそうだが、自分にはとてもできない」と思われるのではないのでしょうか。ここに掲げられた5項目のうち、自信を持って「これはできます」と言えるものが1つでもあるなら、その人は十分に善人だと言えるでしょう。一つもできないのが凡人です。

ところが、5章の最後は「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(5:48)という言葉で締めくくられています。5項目のうち「せめて1つだけでもやりなさい」ではなく、5項目すべてを完全に実行しないと、完全とは言えません。天の父は完全にできるでしょうが、はたして人間に「完全」などというレベルが達成できるのでしょうか。

ここで「恵みによる救い」を教えられてきたクリスチャンは、困惑することになります。確かにパウロは「行いによって救われるのではない」という教えを、彼の手紙のあちこちで繰り返しています。彼の手紙もまた、神の言葉であり、間違いではないはずですが。いったい、私たちはどう考えればいいのでしょうか。だいたい、昔の人々(旧約聖書)の教えですらできなかったユダヤ人たちに、イエスの語る教えが実行できるのでしょうか。だいたい、選民ユダヤ人にさえできなかった律法を、私たち異邦人が行うことなど、できるのでしょうか。この重要な問題については、最後にまとめて論じたいと思います。

●誰のための行為なのか 6:1-4

6章に入ってイエスが論じているのは、信仰実践が「人のための行為」になり下っている、という問題です。まず1~4節を読んでみましょう。

6:1 自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。もし、そうしないと、天にいますあなたがたの父から報いを受けることがないであろう。

6:2 だから、施しをする時には、偽善者たちが人にほめられるため会堂や町の中でするように、自分の前でラッパを吹きならすな。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。

6:3 あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。

6:4 それは、あなたのする施しが隠れているためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであろう。

私たちも、イスラエルで貧しい人への人道支援活動に関わっていますが、どうしても大々的に宣伝するので「ラッパを吹き鳴らす」ことになってしまいます。現代は宣伝しないと資金集めができないので、やむを得ない面がありますが、なるべく、あまりひどいことはしないようにと心がけています。一部の支援団体では、配給の時間を宣伝しておいて、実際にはそれよりわざと遅い時間に配給を開始し、前に並んで待つ人々の写真を撮影して宣伝に利用する、などの行為も行われていると聞いています。

個人的にも、公然と御礼を言われたり、献金者の名前を公表されたりすると、このイエスの教えに反して自分のしている善行を宣伝することになりがちなので、対応が難しいです。

同じような教えは、祈りと断食についても繰り返されています。祈祷会などでは「今夜*時から****において****という集会があり、参加費は***円ですが、どうぞ多くの参加者が与えられますように」などと祈る人もいます。実際、これは神に祈っているというよりも、人に対する「アナウンス」であり、祈った時点で目的が達成されている、つまり「報い」を受けてしまっていると言えるでしょう。集会で代表祈禱を指名されたら、大きい声できちんと祈るのは当然のことですが、人に聞かせることが目的になってしまったのでは本末転倒です。

イエスが「隠れたことを見ておられる父」と言っているのは、本当に父に頼り、父に願っているのかどうか、という心の問題です。人は自分をよく見せたい、悪く思われたくない、という動機によって信仰実践をしてしまいがちですが、それが何のためなのか、と自省してみる必要があります。

「この世で報われないことは、父が報いて下さる」というのがイエスの教え。時に、公然と行われる祈りではなく、隠れた所で積まれた祈りが神を動かすのです。

しかし、すでに学んだ 5:16 にあったように、信仰の行いには「光を人々の前に輝かす」べきだという面にも注意が必要です。隠れていては意味が無いのです。このように、山上の垂訓は、一見、矛盾すると思える教えがいくつか含まれています。それは、状況に応じて両面の考え方が必要だという意味でしょう。人々の前で良い行いをするよう教える 5:16 と、一方、良いことでも隠れて行うべきだと教える 6 章。信仰実践は一筋縄では行きません。御国のために働くためには、失敗を重ねながら「善悪を見分ける感覚を実際に働かせて訓練され」（ヘブル 5:14）る必要があるようです。

そこでイエスの「右の手のしていることを左の手に知らせるな」（6:3）という教えは、何となく禅の公案「隻手音声」を思わせます。それは「両手を打つと、ポンと音が出るが、片

手だとどんな音がするか」という問いです。結局、理性では答えが出ないのですが、イエスの右手と左手の話にも、そういう響きがあります。

●御国が来ますように 6:10

その後には、私たちがよく唱える「主の祈り」があります。これについては、本当に多くの人々が注解されているので、今回はいくつかの点だけ言及しておきたいと思います。

冒頭の「御名があがめられますように」は重要です。天においては、すでに御名があがめられているのですが、問題は地上です。御名が汚されているのです。そこで、神の支配権が地上に及び、御名があがめられるように祈れと、イエスはまず教えます。

次にまた「神の国」が登場します。「御国がきますように。みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように」。ここでもイエスは、天国に「行く」ことではなく、天国が「来る」ように祈れと、教えています。

ですから、山上の垂訓を読んで「自分が天国に行くために、これらの事を行おう」と考えてはいけません。山上の垂訓が常識になる世界が、「この地上に実現する」ことこそ、この教えの目的なのです。

●人の罪をゆるすこと 6:12

また、その後にある「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもゆるしてください」も重要な祈りです。この「負債」は罪を意味しています。それに続いてイエスは「もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう」(6:14)と教えています。

山上の垂訓は、極めて高度な水準で信仰を実践し、周囲の人々に最善を尽くすように求める一方で、他人から与えられる理不尽は全て耐え忍び、他人が犯す罪をゆるすようにと教えます。そして「そうしないとあなたの罪もゆるされない」というわけです。

どうやら、山上の垂訓を語ったイエスは、すべての人が天の父のように完全になれるとは思っておられなかったようです。もし完全になって罪を犯さなくなれるとすれば、その人はもう人の罪をゆるす必要が無くなってしまおうでしょう。でも、自分が不完全であることを知って、人の罪をゆるす態度が良いと、イエスは考えておられるようです。この点は最後にもう一度、論じてみたいと思います。

●天に宝をたくわえる 6:19-21

6:19 あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。

6:20 むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。

6:21 あなたの宝のある所には、心もあるからである。

最初の部分は「地上に宝をたくわえず、天に宝をたくわえなさい」という教えです。地上に宝をたくわえるのは、私たちがしていることなので、誰でもわかります。今では、虫が食ったり、さびがついたりするような形で富をたくわえることは、めったにありません。たいていの人は、銀行口座などに富をたくわえます。

しかし、ネットバンキングをすると、ハッカーにパソコンを乗っ取られて、多くのお金を盗まれてしまいますし、ネットバンキングを使わなくても「オレオレ詐欺」で財産を失います。銀行口座も、銀行の倒産やインフレで資産が減りますし、利子を得ようと株や債券、投資信託を買えばリスクを背負うことになってしまいます。たぶんイエスが現代に生きておられたら、債券や投資信託の話がされたかもしれませんね。

というわけで、地上に宝をたくわえる危険性はわかりますが、「天に宝をたくわえる」とは、どういうことでしょうか。献金箱にお金を入れると、天国に銀行口座があって、神様がそれを記録しておられるのでしょうか。実際、献金が大きな祝福を伴うことは確かですが、ここでイエスが言いたいのは「宝のある所には、心もある」という点、つまり価値観の問題です。

●目はからだのあかり 6:22-24

6:22 目はからだのあかりである。だから、あなたの目が澄んでおれば、全身も明るいだらう。

6:23 しかし、あなたの目が悪ければ、全身も暗いだらう。だから、もしあなたの内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであらう。

6:24 だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない。

しかし、それに続く「目はからだのあかり」(6:22)は、ちょっと難解です。でも、これがお金の使い方に関する教えの中に現れる点を考えると、意味が見えてきます。

昔の人は、目が光を感じるのではなく、目が光を発すると考えていました。日本語にも「眼光炯々」とか「眼光紙背に徹す」などの表現がありますが、詩編 38:10 には「わたしの目の光もまた、わたしを離れ去りました」という言葉があります。目から光が出るというのは物理学的にはナンセンスですが「冷たい視線を感じた」とか「温かい目で見てやって下さい」などの表現から考えて、目から光か何かが発している、というのが人間の自然な感

覚ではないでしょうか。

「良い目の光」は、人に元気を与えるものです。実際、私たちは目で見ただけで人を元気にできます。イエスは私たちに「世の光」(5:14)になるように教えているのですが、目の光が澄んで輝いていると、私たちの全身が明るくなり、周囲の人も楽しくできるのです。

一方、「目が悪い」という表現は、悪意を意味します。悪い目で見ただけで、人を不幸にすることができるかと、中東の人々は信じていました。今でも中東で売られている「メドゥサの目」という魔除けをご存じでしょうか。ガラス製の目玉のような、ちょっと気持ち悪いものです。幸せな人は、周囲から羨望の目で見られるので、不幸になります。そこで、この目玉を身に付けておくと、その視線を跳ね返すことができると言われます。

そして、目が良い、目が悪いという表現は、困っている人に気前よく援助の手をさしのべるかどうか、という意味でも使われました。富を愛している人は、目の前に困っている人がいても、けっして支援しません。これが、「神よりも富を愛する」という意味です。

というわけで、19～24節は全体として、お金を自分のためにたくわえるのではなく、世のため人のために使うようにと教えています。でも、貧しい人を見てお金を出し、いつも人のためばかりを考えていたら、お金がいくらあっても足りません。自分の生活の方が大事だ、というのが普通の考え方ではないでしょうか。

●食物と着物 6:25-30

6:25 それだから、あなたがたに言う。何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。

6:26 空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。

6:27 あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。

6:28 また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。

6:29 しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

6:30 きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。

そこでイエスは「自分の生活のために思いわずらう」ことの無益さを教えます。自分のた

めにお金をたくわえる人は、衣食住のことを重視していますが、これらは単なる生命の維持手段にすぎません。ただ、食物と着物を得ることばかりを考え、時がくれば死んでいくだけなら、空の鳥や野の花と同じで、人間として生きている意味がないというわけです。私たち日本人は、何となく空の鳥や野の花のような生き方が理想のように読みがちですが、よく読むと「あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者」だと言っています。

つまり、空の鳥や野の花でさえ衣食住が与えられているのだから、私たち人間はそういう低次元のことに血道をあげる必要は無い。空の鳥や野の花の世話をしておられる神は、かならずや私たちにも衣食住を与えて下さる、というのです。

空の鳥や野の草は、誰かが苦しんでいても助けたりはしません。しかし人間は、他人の苦しみがわかり、問題解決に手を貸すことができます。つまり、鳥や草と違って、崇高なミッション、つまり神の国の実現のための任務を遂行することができるのです。

注目すべきなのは27節の「だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか」です。人間には寿命があり、肉体的に永遠には生きられません。野の花と同じように、いつかは炉に投げ込まれるのです。ところが、最近では医療技術が進歩して、「インフォームドコンセント」などとやかましく言われるので、病気になると寿命のことで思い悩まなければなりません。

●神の国と神の義 6:31-34

6:31 だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。

6:32 これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。

6:33 まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。

6:34 だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。

「思いわずらう」というのは、衣食住のことについて、つまり自分のためにあれこれ心配することです。それは「異邦人が切に求めている」とイエスは言います。なぜここで「異邦人」なのでしょう。異邦人とは、聖書においてはユダヤ人以外の人々、つまり神との契約関係が無い人々を指します。そういう人々は、自分の命と体を長らえることよりも高い目的を持っていません。彼らは「この世の中で希望もなく神もない」（エペソ 2:12）であり、自分の命を長らえることを「切に求めている」のですが、それらは寿命が来れば消えてしまうもの。どんなに努力しても、結局は何の役にも立たないのです。

しかし、このメッセージの聴衆であるユダヤ人は、神との契約関係にあります。旧約聖書

には、神に従ってさえいけば、衣食住は保証する（申命記 28 章、マラキ 3:10）と、何度も何度も書かれているのです。

神がイスラエルと契約をされたのは、彼らを通じて「神の国」を実現するという、神の側の重要な目的があったからです。そのために働くなら、衣食住は「すべて添えて与えられる」とイエスは説くのです。そう聖書に書いてあって、それをシナゴグで毎週学んでいながら、神が面倒を見て下さることを信じないで、自分で自分の命を守ろうとしているから「ああ、信仰の薄い者たちよ」とイエスは嘆くのです。

●御国のために働いても不足する？

しかし、聖書を読むと、神の国のため働いてさえいけば、衣食住が充足するとは限らないことがわかります。パウロは神の国のために熱心に働きましたが、食物も着物も無い時があった（Ⅱコリント 11:27）と言っています。人間、定められた寿命はあるので、神の国のために働いていても、肉体はいつか死ぬのです。

では、やはり私たちは「自己責任」で自分の命を守るべきなのでしょうか。そうではありません。これは価値観の問題なのです。自分の命を長らえることは人生の最高の目的ではありません。いくら命を守るために思いわずらっても、最後に支払われる報酬は死（ロマ 6:23）しかありません。それはとても無駄な「思いわずらい」です。しかし、神に導かれた人生には目的があります。神の国のために働く者の生活は、神が必要に応じて支えて下さり、仕事が終われば休みを下さいます。そうなれば「やっと仕事が終わって、休みが与えられた」と感謝します。だからキリスト教圏のお墓には「Rest in Peace 安らかに休んでください」と書かれているのです。

神との契約関係に入った人は、自分の生活のことを気にする必要はありません。私たちが神のご計画の成就のために生涯をささげると、神は必要に応じて生活の面倒を見て下さるのです。

さて、神の民となって、神に生活の面倒を見ていただく「特権」は、以前はユダヤ人だけに与えられていました。イエスが説いておられるように、異邦人である私たちは、衣食住を「切に求める」（6:32）以外に道は無かったのです。

ところが、ここに「良い知らせ」があります。異邦人も今やイエス・キリストを通じてこの契約に加わり、「神の国と神の義」のために働く道が開かれたのです。何と、すばらしいことではないでしょうか。ぜひ皆さんも神との新しい契約に加わり、神の国と神の義を求めていただければと思います。

●人をさばくな 7:1-5

7章に入ると「人をさばくな」という一連の教えが始まります。人をさばくのは誰もが持っている性質ですが、時に深刻な害をもたらします。読んでみましょう。

7:1 人をさばくな。自分がさばかれたいためである。

7:2 あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう。

7:3 なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか。

7:4 自分の目には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの目からちりを取らせてください、と言えようか。

7:5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取りのけるがよい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取りのけることができるだろう。

「なぜ、兄弟の目にあるちりを見ながら、自分の目にある梁を認めないのか」という教えは、人のことを批判していながら、自分はそれよりもひどいことをしている、というたとえです。2004年、年金を納付するように呼びかけるCMに起用された江角マキコが、長期にわたって年金未納だったことが発覚し、大問題になりました。その後、当時の与党政治家に年金未納の人がいることに目をつけた野党が国会でそれを追求したところ、自分たち自身も年金未納だったことが次々に発覚し「未納三兄弟」などと揶揄される大失態を演じました。

誰しも他人のミスを追及する時は手厳しいのですが、自分のことになると甘くなります。そこで、この教えについても「誰かさん」のことを思い浮かべて「あの人は目に梁があるのに、他人の目のちりのことを指摘している」と言って逆襲するように使われがちです。実際、タルムードにもそれが登場し「近頃は『目からちりを取れ』と人に言うと、『お前の目から梁を取れ』と口答えされる」(BT Arakhin 16b) という記述があります。これは、初期のクリスチャンたちがこのイエスの話を攻撃用に使ったか、あるいは、人々が攻撃用によく使っていた例話をイエスが逆に使って、各自が自分を戒めるように教えたのか、どちらかでしょう。

イエスの基本姿勢は「人には甘く、自分に厳しく」です。自分が他人を批評するのと同じくらいに、自分にも厳しく基準を適用して自分を律するべきであり、自分で実行できないようなことを他人に要求してはいけない、ということです。ヨハネによる福音書8章に出て来る姦淫の女の話も同じで、自らも同じように罪を犯したことがあるなら、他人を糾弾することができません。

しかしながら、これが「悪事を見過ごす」という方向に働かないように気を付けるべきです。ユダヤ法によれば、ある犯罪が行われているのに、それを見て見ぬふりをした者は、

それに加担したものと考えられます。特に、強い者が弱い者をいじめている場合に、この教えをもとに「人をさばくな」と言って黙認するのは間違いです。これもまた、「善悪を見分ける感覚を実際に働かせて訓練される」必要がある問題です。

●聖なるものを犬にやるな、豚に真珠を与えるな 7:6

7:6 聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな。恐らく彼らはそれらを足で踏みつけ、向きなおってあなたがたにかみついてくるであろう。

日本語に「猫に小判」という言葉もありますが、人の価値観は様々で、いくら価値の高いものでも価値のわからない人にとっては何の意味もありません。ここで「真珠」とは真理の意味だと見られます。イエスは高価な真珠のたとえ（マタイ 13:45-46）でも、真理を真珠にたとえています。世の中には真理の言葉がわからない人々もいます。この節は、そういう人々に無理に真理を伝えるな、という意味だと解されます。イエスはマタイ 10:14 には、弟子たちを歓迎せず、福音を聞かない人がいれば、その家や町を立ち去る時に「足のちりを払い落とす」ようにと教えています。しかし、これは最初から福音を伝えるなど言っているわけではありません。福音を伝えるように努力をした上で、それでも相手が受け入れなければ、あえて強要する必要は無い、という意味です。

伝える努力は必要ですが、だめな場合もあるので、ある程度以上は努力する必要は無いという意味でしょう。いくら正しい事でも、あまりにこだわると、かえってトラブルになることがあります。

●求めよ、そうすれば与えられるであろう 7:7-11

7:7 求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。

7:8 すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである。

7:9 あなたがたのうちで、自分の子がパンを求めるのに、石を与える者があろうか。

7:10 魚を求めるのに、へびを与える者があろうか。

7:11 このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物を知っているとすれば、天にいますあなたがたの父はなおさら、求めてくる者に良いものを下さらないことがあろうか。

「求めよ、さらば与えられん」は、とても有名な言葉です。実際、神は人に良い贈り物をしたいと願っておられるので、人が求めるのを待っておられるのです。しかし、人が神に何かをお願いしさえすれば、何でもかなえられるとすれば、人々がそうしないわけはあり

ません。イエスがこれをわざわざ人々に教える必要があったのは、物事がそう単純ではないからです。

たとえば、第二コリント 12:7 以下には、パウロがある肉体的な問題を取り去ってもらえるように神に三度も祈ったが、神に拒否された、という例があります。祈っても神からの答えは「NO」ということもありうるのです。

また、ルカ 11:5-13 には、もう一つ重要な教えがあります。それは「真夜中に来た友人」というたとえ話ですが、神は時にしつこくお願いしないと聞いて下さらない、という教えです。I 列王記 18 章では、エリヤが 1 回祈っただけで火が天から下りましたが、雨をふらす時になると、僕が七度も見に行くほどの時間、祈り続けてやっと答えがありました。

私たちがイスラエル回復と再臨を何十年も祈り続けていますが、私たちはその答えの兆候であるメシアニック・ジューの出現を、今やっと見ているのです。でも、ユダヤ人たちは約束の地への帰還を約 2 千年も祈りました。神は時に何世代もかけて祈りにお答えになります。

祈り続け、求め続けることは重要です。すでに服役を終えた人が再審を求めて何十年も訴えている事件がよくありますが、普通の人ならあきらめてしまうでしょう。でも、あきらめずに願ひ続けることが人の心を動かし、神の心を動かすのです。

求めることは重要です。マタイ 6:8 には、「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである」と教えられています。それでも私たちは祈る必要があるのです。人が「神なしでもやって行ける」と考えることを、神は大変お嫌いになります。だから、必要なものを神に願ひ求め、神から与えられたら感謝の祈りをしましょう。

●人にしてほしいように、人にもしてあげなさい（黄金律） 7:12

7:12 だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。

ルカ 6:31 にもあるこの原則は、別名「黄金律」とも言われ、他の賢人たちも似た教えを語っています。イエスよりも少し前の時代を生き、ユダヤ人のラビ、ヒレルも「あなたにとって好ましくないことをあなたの隣人に対してするな」という言葉を残したと言います。孔子や釈迦も似たことを言いました。しかし、興味深いことに、こうした名言の大半は否定形、つまり迷惑行為の禁止であるにもかかわらず、イエスは肯定形、すなわち、積極的に人々の暮らしを良くすることを提言しました。

バーナード・ショーは、人はみな好みが違うので、自分の感覚で「してほしいこと」を人にしてみても、それが必ずしも相手を喜ばすことにならないと指摘しました。食べ物は確かにそうで、好みは人それぞれ。生き方も文化によってそれぞれです。人はみな、相手の

「してほしいこと」を考えなければなりません。でも、多文化共生社会になるにつれ、これはとても重要になりつつあります。自分が「してほしいこと」を相手に知らせる工夫も重要になっています。こうして、少しでも住み良い社会を目指す必要があります。

●狭い門から入れ 7:13-14

7:13 狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。

7:14 命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない。

「狭い門からはいれ」は、競争率の高い試験などを表現するのに使われる慣用表現ですが、もともとは聖書の言葉から来ています。約束の民は、神から命の言葉を与えられ、それを日々学んでいたのですが、それでも滅びに至る人々が多かったです。パウロはユダヤ人たちが「神に対して熱心であることはあかしするが、その熱心は深い知識によるものではない」(ローマ 10:2)と書いています。彼らは神に選ばれ、それなりに熱心にやっていたのですが、それだけでは駄目だったのです。これは確かに「狭い門」でした。

こうして山上の垂訓を学んでくると、その要求水準の高さに驚かされます。この後も「良い実」を結ばないのは悪い木だと断罪されていますが、誰が自信を持って「私は良い実を結びました」と言えるでしょう。そしてさらに「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」(7:21)と言われると、さらに目の前が暗くなります。こんなに水準の高いものを完全実行して「岩の上に家を建てる」のは、不可能に近いのではないのでしょうか。

●恵みによる救い

さて、ローマ書の4～7章に展開された「恵みによる救い」を学んでから、山上の垂訓を学ぶと、あまりの違いに驚かされます。パウロは「律法の行いによる者は、皆のろいの下にある……律法によっては、神のみまえに義とされる者はひとりもない」(ガラテヤ 3:10-11)と力説します。彼は、普通の人間は律法に従った生き方をすることができない、と言います。この教えと、山上の垂訓はどう調和するのでしょうか。

イエスがこのような教えを語った背景はパリサイ派の律法解釈でした。彼らは律法を様々な方法で厳密に解釈し、それを実行するように人々に教えたのですが、自分たちはそれを「行ったことにする」ために、様々な抜け道を考えたのでした。そして、自分たちは律法を守り、命に至る道を歩んでいると信じていました。

ルカ 18:10-14 には、パリサイ人と取税人が宮に行く話が出て来ます。パリサイ人は「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します…」と祈るのです。実際、彼はかなりしっかりと戒律を守っていたのでしょう。しかし取税人は下を向いて「神様、罪人のわたしをおゆるしてください」と祈るのです。ところが取税人は義とされ、パリサイ人は義とされなかった、とイエスは言います。パリサイ派の行いは、完全ではなかったかもしれませんが、取税人よりもはるかにマシだったことでしょう。それでもイエスは取税人が義とされたと言います。そしてこの話の結論は「およそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう」なのです。(マタイ 19:25 も参照)

ここで話は最初の「心の貧しい者はさいわいである」に戻ります。貧富の差があるように、当時は霊的にも格差がありました。立派に祈りをとなえて施しをし、断食もして「霊的に素晴らしい生活をして、聖書の知識に精通したパリサイ人。一方、霊的「落ちこぼれ」の取税人は、自分が全く神の前に出られるような状態ではないと知っていました。ところがイエスは、そういう「霊的な貧乏人」こそが天国の住民だと言ったのです。

皆さんは、自分が神の前に立派に生きていて、他の人よりもマシだと思っておられるでしょうか。でも、山上の垂訓を初めから終わりまで熟読した後で、私の生き方は他の人よりもマシだと、自信を持って言える人は、誰もいないでしょう。そうすれば、誰もか取税人のような祈りができるのです。

では、山上の垂訓は「絵に描いた餅」であり、実行不可能なものなのではないでしょうか。そうではありません。神の選びの民が兄弟に向かって「馬鹿者」とばかり言い合っていたのでは、神の面目がまるつぶれです。そこで神は、エレミヤ書 31:31 で、新しい契約（新約）を立てると言っておられるのです。

Jer 31:31 主は言われる、見よ、わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る。

Jer 31:32 この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。

Jer 31:33 しかし、それらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである。すなわちわたしは、わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にする。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となると主は言われる。

Jer 31:34 人はもはや、おのおのその隣とその兄弟に教えて、『あなたは主を知りなさい』とは言わない。それは、彼らが小より大に至るまで皆、わたしを知るようになるからであ

ると主は言われる。わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」。

神は「わたしの律法を彼らのうちに置き、その心にしるす」と言われます。すると、みんなが主を知るようになって、もう教える必要がなくなります。これはまだ完全には実現していません。なぜなら、まだ地上の教会に多くの牧師や教師がいて、こうして聖書を教えているということ自体、まだそれが成就していないことを示しているからです。でも、この預言は少しずつ成就しています。それは、今や聖霊が私たちの間に働いているからです。私たちが洗礼を受けると聖霊が与えられ、聖書の言葉が解き明かされます。そして私たちは、少しずつ変えられて、この山上の垂訓に書かれた生き方に近づくことができるのです。どうぞ、その恵みにあずかっていただきたいと思います。

この長い学びが、最後まで守られたことを感謝します。